

「正義」はどこから来る

徳永 進

鳥取赤十字病院内科医師

子供のころに見た映画やテレビには、農民や庶民をいじめる悪者が登場して、思う存分悪事を働いた。しかし最後には、白馬に乗った正義の使者がやってきて、悪者をやっつけた。子供のぼくらは、正義の使者が登場すると拍手し、見終って満足した。正義は間違いなくあり、正義の使者は必ず来るものだと思い込んだ。あの正義の使者は、いったいどこからやってきたのだろうか。

医者になったころ、病気の診断をつけることができなくて困った。異常がわからないということもあるけれど、その前に正常ということがわからなかった。わからなかったが、正常という世界が決められてあり、それに入らないものが異常であると思った。以来、正常の血圧、正常の心音、正常の尿に、正常の血液、正常のレントゲン写真にCTにエコーにMRと、正常の世界は限りなく広がった。白衣のポケットには「正常値と異常値」というハンドブックが入っていた。正常値は正しく、異常値は悪であるかのように思えた。

そのころ、慢性肺気腫の急性増悪で(というのは後年になって理解したことだけれど)、呼吸困難を訴えて救急室に運ばれて来た患者に出会った。動脈血中の PO_2 は35 mmHgで、明らかな異常低値。入院させて、 $O_2=3$ l/分を吸入させると、 PO_2 は55 mmHgと正常値に近づいたのに、患者はケラケラ笑い、そして意識を失っていった。 CO_2 ナルコーシスの状態に陥った。低酸素の状態でも生きてゆけるよう、こう

した患者たちは呼吸補助筋を鍛え、血中のヘモグロビン量を増加させて、恒常性を保つよう努力している。そのことを無視して、正常値を強制すると、人を死へ追いやるということを教えられた。

癌は告知するのが正しいのか、隠すのが正しいのか、という問いに、ぼくはある時期縛られていた。「告知する時代を迎えた」という論調がマスコミに流れるようになった。告知するのが正しいのかも知れないと思い、何人かの患者さんに告知した。泣き出す人、耐える人、黙ったままになる人たちがあった。告知するのが正しいわけではさらさらないことを知った。「告げる、告げない、どちらが正しい？」という問いそのものが、間違っていることに気づいた。正しさは一つではなく、また、決められた正しさというものがどこかにあるのではなかった。

正しい心、正しい天候、正しい女、正しい家族、正しい分娩、正しい国家、正しい脳死に正しい死に方、そんなものが一体全体、あるのだろうか。

これこそが地上で唯一正しいものだ、と主張し強制する時、国家も宗教も、思想も教育も、家族も個人も、子供も老人も、生き続けられない。正義はそれを振りかざした時、消滅する。

臨床で患者さんを見ていると、ひとりひとりの正常値、ひとりひとりの正義ということを感じる。白馬に乗った正義の使者は、天からやってきたのではなく、ひとりの人の中からやってきたのだろう。